劉神　　（機神咆哮デモンベイン　リンク）

霧丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
劉神　（機神咆哮デモンベイン　リンク）

【Ｎコード】
Ｎ２３３１Ｗ

【作者名】
霧丸

【あらすじ】
機神咆哮　デモンベインの無限螺旋の中でアイオーンを駆り決して埋めることの出来ない虚無を戦うことで埋めようとした青年がいた……彼は自分の心に空白を穿った金色の獣との戦いに挑み消えた――――
敗北した主人公（九郎じゃない）がオリジナルの異世界へと流されます。

気まぐれで書き始めたので更新が遅いです。

デウスマキナ解説

デウスマキナ

鬼戒神と描く機械仕掛けの神で有り魔導書の人外の理論が顕現した神の模造品
一種の固有結果であり、動力に術者の生命力や霊力を使用し召喚・維持だけでも術者の命を削り戦闘になると消費が爆発的に増え一定時間動かすだけでも命にかかわる。（例外も存在する）
また、人外の論理で生み出され行使されるため術者は人外の論理を受け入れるか、耐えきるだけの器がないと狂死するか反転し邪神の眷属となる。

大きさはさまざまだが大体５０m前後

（最少２０m位　最大２００m位）

ラバン・シュリュウズベリィ（声、アナベル・ガトー）曰く

「機神召喚もまた魔術、術者の能力・位階・属性によって同じ魔導書であろうとも召喚されるデウスマキナは変化する」

とのことで固有結界と同じであることがうかがえる（デモンベインは厳密にいうとデウスマキナを模して造られたロボットであるため例外で変化しない）

マナウス神像、マスターテリオン（緑川）の心臓

機能的にはアイオーンのアルハザードのランプと同じ”無限の心臓”という儀式魔術中枢が内包された呪物

デモンベインの獅子の心臓はこれを機械的に再現したもので並行世界への門を開き異界から無尽蔵のエネルギーを引き出す。

尚、銀鍵守護神機関に組み込むことで制御が可能となりデウスマキナの動力となる。（軍神強襲デモンベインにおいてデモンベインに組み込まれマスターテリオンと宇宙空間で戦闘を行った。マスターテリオン曰く「今までのデモンベインの中で最も強い攻め」とのこと）

デモンベイン原作においてマスターテリオン（グリーンリバー）の搭乗機、リベル・レギスの動力中枢にしてマスターテリオン（鮮血神ズウァイア）の心臓

獅子の心臓：無限の心臓を機械的に再現した儀式魔術中枢

銀鍵守護神機関：儀式魔術の無人化・高速化を目的に作られた機関、機械が魔術式を解析、制御を行うので邪神の神気による発狂死などは起こらず安定した動力をえられる。

（無限の心臓に霊的に接触した場合脳と視神経が侵食されて腐食する）

デモンベイン

覇道　鋼造が制作した鬼戒神（デウスマキナ）（といっても過去に飛ばされたデモンベインを修復したもので一から作ったわけではない）　通常のデウスマキナと違い通常物質を錬金術で加工して作られているため顕現した際に世界の修正力に抗う必要はなく、動力に並行世界から組み上げたエネルギーを使用するため理論上無制限に稼働でき、適性がある魔術師が乗れば一切負担なく操縦できる唯一のデウスマキナ（このため人間のためのデウスマキナとも呼ばれる）

動力は【獅子の心臓（コルレオニス）】を銀鍵守護神機関で制御し使用している。

また、魔導技術を使用しているため搭乗者は魔術師でなくてならなく、制御コンピューターとして魔導書が必要

防御力は結界などもありかなり高いのだが相手の攻撃が強すぎて紙屑的な印象を受ける（しかも本編初期以外では高速自己修復まであるため防御？何それおいしいの？的な感じ）

全長約５０ｍ（実は武御雷とデザイナーが同じらしい）

本編の公式ＥＤだと時空間の狭間に取り残された主人公こと大十字九郎をもとの世界に送り返すため自身の心臓を抉り出して握り潰し動力炉を暴走させて次元移動ゲートを作り送り返したのち８００年前の地球のアリゾナ砂漠に落下風化の一途を辿っていったが機神飛翔の隠しＥＤで覇道財閥に回収され修復された。

別名。最弱無敵のデウスマキナ、魔を断つ剣、無垢なる刃

搭乗者

覇道　鋼造　　魔導書　　ネクロノミコン機械言語版

大十字　九郎　魔導書　　ネクロノミコン原本　アル・アジフ

エドガー　　魔導書　　上記と同じ

大十字　九朔　　ネクロノミコン血液言語版

固定武装（魔導書は除外）

頭部バルカン　×２

脚部シールド　アトランティス・ストライク：空間圧縮とその解放によるエネルギーを直接相手にぶつけるけり技（主に回し蹴り・かかと落とし・ライダーキック）

レムリア・インパクト

コル・レオニスから引き出される無限熱量を相手の内部に直接叩き込み、重力無限大、熱量無限大、質量ゼロの状態に相手を晒し消滅させる武装

リベル・レギス

グリーンリバー　ライト屈指の最強機体

マスターテリオンの搭乗機にして彼の分身、真紅の堕天使、蝙蝠のような皇帝とも比喩される。

通称、皇帝モード、決戦モードの二つの形態があるがアニメでは決戦モードしか登場しない

マスターテリオンが聖書に弓引く獣を象徴しているのに対して獣に力と権威を与えるとされる紅い邪竜（サタン）がモチーフ

マスターテリオンは邪神ヨグ＝ソトースの息子であり、邪神形態＝鮮血神ズウァイア
人間形態＝マスターテリオン　　機械神形態＝リベル・レギス

といった関係であり実は制御に魔導書は必要ないが、真の実力を引き出すには魔導書が必要不可欠。

勇者王に乗っ取られたことがある。（本編の一ルート）

動力はコル・レオニスのオリジナル”無限の心臓”でこれはヨグソトースの影の一形態でありマナウス神像におさめられている。

一度、覇道に奪取されデモンベインに組み込まれ二つの心臓を用いたデモンベインと戦闘を行ったことがある。

搭乗者

マスターテリオン　魔導書　ナコト写本

リューガ・クルセイド（勇者王・アズラエル・シロー　アマダ）

上記を体内に取り込んで使用

武装、多すぎて書けん

ちなみにグリーンリバーの敵としてよく出てくる子安もこの作品に登場している

アイオーン

ネクロノミコン原本アル・アジフから召喚される最強のデウスマキナ

漆黒の装甲を持つデモンベインによく似た機体だが、デモンベインの元となった機体でデモンベインが似ているのである

召喚する術者に応じて姿形が変化し、アズラッドが召喚したアイオーンが一番有名で剣の属性を持っていた。

動力である霊燃機関【アルハザードのランプ】は術者の霊力を燃焼させエネルギーとするもので霊力や魔力が足りないと術者の生命力を無理やり削りエネルギーへと変え多くの術者を食い殺した機体

アイオーンはマスターテリオンとの戦闘の折大破し、アル・アジフを脱出させたのち九郎の先代のマスターオブネクロノミコンの亡骸と共に爆散、消滅した。

また、頭部の装甲の下にはデモンベインと同じ素顔が隠されている。

尚、本作のアイオーンは主人公がネクロノミコン・ギリシャ言語写本から召喚したコピーであるため能力が各5パーセントダウンしている。

主な武装

バルザイの偃月刀

炎の属性を持つ魔術師の剣にして杖、多くのマスターオブネクロノミコンが愛用した。

魔銃：クトゥグア

クトゥグアの術者さえ焼き尽くす炎の力に指向性を与え撃ちだすビームピストル、威力はかなり高い

灼熱結界

術者の霊力を過剰なほど燃焼させ周囲一帯を焼き尽くす炎の嵐、アズラッドはよく使っていた

対霊狙撃砲・呪文螺旋（スペル・ヘリクス）

魔術師の杖、先端を展開し、魔砲形態となる

クトゥグアの神力を一気に解放しいかなる相手だろうと焼き尽くす。ぶっちゃけＳＬＢなの！！

（＊（・∀・）＊（

その威力に比例し心身に掛かる負担は凄まじく発動さえ不可能な術者も多かった。

捕縛結界　アトラック＝ナチャ

魔力で編まれた糸で相手を拘束する呪文、エドガーはマグロをこれで釣り上げていた。

神の摂理に挑む者達（前書き）

プロローグ1の誤字修正・改訂版です最後を変更しました

神の摂理に挑む者達

数々の命を内包する水の惑星――地球

その青き惑星が浮かぶ絶対零度の凍てつく真空の海――宇宙、
いくつもの星々をその内に収め星霜のベールを遠くに被るその暗黒
の大海にて紅き惑星を視界に収めながら二体の機神が衝突する。

「マスターテリオォォンっ！！！！」

その二体は四肢と頭部、人間に似た構造を持つ。人が神の写し身だ
と云われるが故に人と同じ姿を持つそれらもすべからず神の模造品
であった。
暗黒の海を翔る機械仕掛けの神の内の片割れ…永劫の名を冠する漆
黒の機神はまるで蝙蝠のような紅い羽根を広げ、翡翠色のフレアを
噴出させてもう一体の機械神――

まるで頭から鮮血を被ったかのような深紅の逆さの蝙蝠のような、
皇のように不動で虚空に立ち塞がる機神へと向かい突撃する。

――魔銃鍛造――

漆黒の鎧を纏った紅翼を携えた機械神はその左腕に焔を生み出す。
その焔は一気に収束、冷え固まり黒光りする鋼のリボルバーを生み
出させる。

そしてその殺意の銃口を目の前の鮮血神に向け引き金を引く。

“ダァンっ！ダァン！ダァン！！”

撃鉄が落ち、シリンダー内部の焔銃弾が光の速度で打ち出される。

「――――諦めよ」

響き渡る気だるそうな声色の青年の言葉

その言葉と共に鮮血機械神――――法の書の名を持つ機械神［リベル・レギス］はその右腕を翳す。

すると見えない障壁が展開され、衝突する焔銃弾をことごく弾き、無意味な魔術文字の破片へと砕く

「魔刃鍛造――――――バルザイの偃月刀っ！！！！」

宙を翔ける漆黒の機械神、永劫（アイオーン）はその右腕に炎を生み出し新たな凶器を生み出す。

それは魔術師の杖にして剣、魔術師バルザイが製作した偃月刀であり数多くの魔との戦いにその命を燃やし尽くしていったマスターオブネクロノミコン達が愛用した武器だ。

そして、アイオーンはそれを振りかぶり、リベル・レギスへとその

刃を振るう。

“ガキン”

しかし、その刃は目の前の鮮血機械神が手に顕わした黄金の十字架に受け止められてしまう。

「――――貴公が持つ魔導書、ネクロノミコン、ギリシャ言語写本は確かに数ある死霊秘法（ネクロノミコン）の中でも最高位の力を持つ――――しかしっ！」

“カァァン！！”

剣越しに見据えていたリベル・レギスのその嘲笑っている能面のような顔に穿たれた緑色の双眸が輝いたその瞬間、バルザイの編月刀が十字架剣によって弾かれアイオーンも姿勢を崩し仰け反る。

「余とこのリベル・レギスを相手にするには到底足らぬぞ――――！！」

「グっ！！」

リベル・レギスの左掌がよろけたアイオーンの貌を鷲掴みにする。

そのあまりの握力にアイオーンの顔に無数の亀裂が奔り瞬雷が迸る。

「エセルドレーダ」

「イエス・マスター

――死に雷の洗礼を――――ＡＢＲＡＨＡＤＡＢＲＡ――」

青年の声に応える少女の声――

それと同時にアイオーンの機体に掴まれた掌から呪いを帯びた雷が流れ込む。

「がああああああ――――――っく！！！」

アイオーンの四肢が痙攣し、機体のあちらこちらが爆ぜ飛び、真空の無重力の海に水銀の血液をまき散らし紫電を奔らせる。

感覚接続（フィードバック）が搭乗者である青年の肉体をも傷つけその口端から鮮血が滴る。

「――――飛べ！」

鮮血機械神はその手に掴んだアイオーンを振り回しそして投げ飛ばす。

「――――――――――ガっ！！！」

吹っ飛ばされたアイオーンは火星周辺を漂う隕石群、アステロイドベルトへと突き刺さり途中の隕石を幾つも砕きながらやがて直径５０ｋｍにも及ぶほどの巨大な隕石にめり込む

それによって先の攻撃によって穿たれた機体の亀裂がさらに広がり水銀の血液が宙に球になって浮かぶ、

「俺は…俺は――――引き下がれるかぁぁぁっ！！――――！アルハザードのランプ燃焼！！！」

術者の命を力に変える大規模魔術式中枢機関、アルハザードのランプが超活性化。アイオーンの各部のから緑色のフレアが噴出し、突き刺さっていた巨大隕石を粉々に砕き、その中でアイオーンが立ち上がる。そしてその漆黒の機体を緑色に染め上げる。

そしてアイオーンの罅割れ砕けた頭部装甲の下に隠されていた素顔、その顔が歯を食いしばり紅い瞳が宙に浮かび自分を見下ろす鮮血機械神をにらみつける。

――――忘れるな、奴に奪われた者(あいつ)を――――

悲しみを勇気に、喪失感を憎悪に、絶望を怒りに

「くっくくくく――――――――ハハハハハハハハハハハハハハっ！！！

貴公の憎悪は実に心地よいぞ、無限を超える円環の中では貴公のようなイレギュラーな存在が無くてはならない、――――余の絶望を癒す糧となるがいい」

自分を見下ろす機械仕掛けの鮮血神を駆る金色の瞳と髪を持つ青年が心底愉快に哂う。

「――お前はそのために……そのためだけにアイツを――っ！！！」

奥歯が砕けんほどに噛みしめながら怨嗟を吐き出そうとするが言葉は出ない、憎しみが強すぎるのだ。
そんな青年の様相に深い愉悦を感じながら機械仕掛けの神に力と権威を与えられし獣が言う。

「そうだ、貴公の復讐劇は余にとって最上級の“遊戯”であったぞ」

――――――！

彼の憎しみで茹っていた脳の最後の何かが……切れた

「ふ――――巫山戯るなぁ――――――――っ！！！！」

アイオーンを駆る青年が叫んだ、その瞬間、アイオーンの瞳が輝き――
その背の紅い双翼、シャンタクが変化したフライトユニットより超高密度のエーテルフレアを噴出させ翡翠色の尾を引きながら怨敵たるリベル・レギスに迫る！

魔術式：ド・マリニーの時計塔を並列起動し光の速さを超えてリベル・レギスに体当たり、そのまま高層ビルほどもあるその鋼の塊である超重量を一気に押し出す。

「そうだ！そう来なくては面白くない、もっと――――もっとだ！！！もっと余に魅せるのだっ！！

怨嗟の慟哭を！嘆きの絶頂を！憤怒の炸裂をっ！！！――――夜空に咲く大華のような鮮烈な強烈な熾烈な感情を魅せるのだっ！！！」

「貴様は――――――喋るな……！」

容易く人体を破壊する重力加速度の中で獣が愉快で堪らない、楽しくて堪らないといった声色を奏でる。

青年の怒りに呼応してアイオーンの動力機関で膨大なエネルギーが咆哮し背の双翼が出力を上げ爆裂する。二体の機神はその速度をさらに加速、光速を遥か彼方に置き去りにして二体の戦いを見守っていた紅き惑星、火星へと突入する。

「――――東雲！！貴公――――余を道連れにするつもりか！？」

「貴様を殺せるのなら――――――本望だっ！！！」

大気との摩擦熱により赤く染まっていく機械仕掛けの神しかも翡翠色に染まった機神、アイオーンは魔力で編まれた蜘蛛の糸、束縛魔術兵装：アトラック＝ナチャで双方の機体を絡め取って密着させている。

「――――我は、神意なり《Ｉ　ａｍ　Ｐｒｏｖｉｄｅｎｃｅ》――――」

アイオーンを駆る東雲と呼ばれた青年が呪文を口ずさむ、命を力に変える機関であるアルハザードのランプが極限まで燃焼しアイオーンの全身を駆け巡るエネルギーが右腕に収束し神の概念を具現化さ

せる。
それと同時に彼の駆る機神の右腕が青白い光を放つ灰色の焔に覆われる――――
――――この一撃に極限まで高めた俺の命の炎…その、すべてを注ぎ込む……っ！
それは全ての熱量を喰らい尽くす一の無限熱量
「負の無限熱量――――っ！？余と同じ呪法を何故――――？」
「マスターテリオンっ！！芥子粒（けしつぶ）になれぇぇ――――――――――ッッ！！！」
「くっ！！目には目を刃には刃を――というわけか！！」
忌々しいと毒づきながらマスターテリオンは相機の左腕に内蔵された必滅魔導兵装を起動させる。
リベル・レギスの形作られた左手刀もアイオーンの右腕と同じく負の無限熱量を帯び凍てつく――――
「「ハイパーボリア――――――――ゼロ・ドライブっ！！！！」」
ぶつかり合う負の無限熱量――――クトゥグアの子、アフーム＝ザーの旧神に封印されながらも漏れ出た神力で超大陸、ハイパーボリア

を消滅させたそれが真っ向からぶつかり合う。
その衝撃は火星の一帯を吹き飛ばし後に海と天文観測で言われるようになる地形を作り出した。

「――――驚いた、此処までの力をたかが写本のネクロノミコンで――――それからデウスマキナを召喚するに留まらず余とリベル・レギスにここまで抗うとは――――どうやら貴公を見くびっていたようだ――――
正直、余と渡り合えるのはは大十字　九郎とアル・アジフ――――二人が駆るデモンベインを置いて他に存在しないと思っていたぞ。」

地表に穿たれたクレーターとも認識するにはあまりに大きすぎる陥没した一帯の中心部――――
半壊しながらも大量の砂を滴らせながら立ち上がるリベル・レギス、その左半分はほぼ完全に消滅し内部機関が露出し紫電と水銀の血液が流れ出ていた。

「ぅおお……！」

リベル・レギスが見据える視線の先でアイオーンもまた立ち上がる。
アイオーンもまた右半分を失い緑色のエネルギーが消え去りアイオーンの装甲は元の漆黒へと戻ってしまっている。

「――――復元呪詛起動――――」

アイオーンを駆る青年の言葉と共にアイオーンの存在時間が損傷する前まで逆行し機体損傷をなかったことにする。
文字通りビデオの巻き戻しのように復元されていくアイオーン、それをマスターテリオンとその魔導書の精霊エセルドレーダ駆るリベル・レギスが仮面の双眸で見据える。

「愉快……愉快だこれこそ戦いの空気。
躰の芯から凍えるような灼熱の恐怖。これこそ戦いの芳香（におい）。かくも芳しき、腐れ堕ちる死骸の腐臭。……良かろう――」

マスターテリオンの言葉と共にリベル・レギスの機体がまるで時間が巻き戻ったかのように一瞬で内側から機械部品が溢れ機械仕掛けの骨格を形作りそれを深紅の装甲が覆い即座に復元した。

「貴公を余の好敵手として認め、全力を出すとしよう――」

復元の終了したリベル・レギスの蝙蝠の羽ような機体の上半身を覆っていたそれが展開しリベル・レギスの真の姿が曝される。

それは鮮血を被り紅く染まった堕天使、６６６：ナンバーオブザビースト、七角十頭の獣に力と権威を与えるとされるサタンそのもの――

その圧倒的な神気、世界中の妊婦の半分を雄叫びだけで流産させそれと同数の異形の子を産ませ街一つを恒久的な呪いで汚染し焦土と

化した邪神ズアウィアの神気が全力で解き放たれる。

「さぁ、余を楽しませろっ！！神に叛逆せしものよ！！！」

リベル・レギスが自分の身を包んでいた赤い双翼から高密度の魔術フレアを噴出させ黄金の十字架剣を手に漆黒の機械神に切りかかる。

「――――魔刃鍛造――――――っ！！」

再びアイオーンのの掌に炎が生まれ一振りの剣を刹那の間に鍛え挙げる。
しかし、今度は鍛え上げる際に形状に干渉――――５０ｍの巨体に合わせて巨大となった先の偃月刀よりも更に巨大――――

デウスマキナほどもある巨大な鉄塊刃（ツヴァイハンダー）を鍛え挙げる。

「ヌォオオ――――――――――――っ！！！」

アイオーンも漆黒の機体に映える赤い双翼より翡翠色に輝く魔術フレアの噴出と５０ｍにも及ぶ巨大な機械の体のすべてを使った重心移動と合わせ間合いに入ったリベル・レギスを横なぎの超重量の斬激をもって迎撃する。

”ダァァアアアアアアアアアアンンっ！！！”

紅い荒涼とした大地を揺さぶる衝撃が波紋を広げ地面を土砂として吹き飛ばすその中央で刃を交わす二体の機械神

文字通り火花を散らし真っ向から鬩ぎ合う。

「その程度かっ！！」

リベル・レギスはその細身のボディからは信じられないほどの膂力を発揮しアイオーンが手に持つダンビラを弾くと飛び上がる。

「貴公の憎しみにより咲く鮮花を魅せろ！！」

天に掲げられた十字架剣が天を眩く発光し天を衝く――――まるで空を二つに分かつほどに巨大な十字架剣が上段に構えられた。

「北落師門（フォマルハウト）より来たれ――――――！」

弾かれ構えなおされた鉄塊刃の表面に無数の魔術文字が蠢き、その密度を一瞬で高め炎の神の力をその刀身に降ろす。

形は違えどこのダンビラもまた《バルザイの偃月刀》…当然、魔術師の杖としての機能は生きたままだ。

刀身から超高密度のプラズマが吹き出てエネルギーの更に巨大な星を撫でるほどの刀身を形作る。

『グランドクロス！！／クトゥグアーーーーっ！！！！』

天を切り裂く十字架剣と星を薙ぐ超高温のプラズマの刃が交差し行き場を失ったエネルギーが波紋を広げ更に広大なクレーターを抉り景色を白く染め上げる。

視界を焼く閃光の中、交差する刀身たちは互いの発する力の本流に絶えられずガラスのような音を立てて崩壊する。

その白い世界の中でリベル・レギスが白い闇を引き裂いてアイオーンに迫る。

それに反応したアイオーンとリベル・レギスの両腕が互いを掴み取っ組み合いへと持ち込まれる。

「アイオーンっ！！」
「リベル・レギスっ！！」

アイオーンの赤い瞳とリベル・レギスの緑の瞳が輝きを放ちその腕の力を込め、赤い翼より噴出すフレアが増す。

互いの出力（パワー）は互角

「――燃え尽きろ――――――！」

アイオーンの魔導機関エンジン、アルハザードのランプが術者である青年の命を燃やし漆黒の機体に内包される魔力が急激に高まる。

各間接から超高温の朱炎が装甲の隙間から噴出する。

夜の闇のような漆黒の装甲が赤熱化する。

それは火星表層に生まれる小型の太陽

その呪術的な炎は一瞬で周囲を溶解させクレーターにマグマの湖を作りだす。

しかし――――

「これは随分と熱い情熱だ――――ならば余も返礼せねばなるまい」

灼熱の太陽の中で悠然とたたずむ獣の鎧

リベル・レギスのアイオーンの左掌をつかんでいた右前腕の装甲が左右に開き１１の砲塔が出現する。

「ン・カインの闇――――」

砲塔により作り出される黒い光球、超高密度に重力弾だ。
それが至近距離で解き放たれる。

「ぐあああああ…がああああ！！！！！」

次々と黒い光玉がアイオーンに直撃しその機体を抉り砕いていく。
胸は大きく抉れ、右肩が砕かれ、左腕の肘が砕かれ、左太股が砕かれ左足が地に落ち、赤い双翼は虫食いだらけとなる。
飛行ユニット、シャンタクと脚部が破壊されアイオーンの漆黒の機体は自分が作った真っ赤な溶岩の泉に沈む。

その様子を見下ろすリベル・レギスの貌はまるであざ笑っているかのよう

「うおおおおおおおっ！！！！！マスターテリォォォォォンっ！！！！」

もう残り少ない魔力でシャンタクだけ修復したアイオーンが紅いマグマの水面を割って飛び立ちリベル・レギスに迫る。

「――――――――――――もうよい…飽きた――――」

冷徹な声が響くと共にリベル・レギスから五本の金十字架が飛来しアイオーンの残った四肢と胴を貫き、そのままクレーターの側面に

貼り付けにする。

「マスター……テリオンっ！！」

貼り付けにされ尚、敵に向かおうとする漆黒の機体。その体は動くたびに夥しい水銀の血液が流れ出て紫電と共に各部が爆発する。

それでも尚、飛び立ち戦おうとする。

「貴公の憎しみは甘美であったが甘味は飽きるのが早いものでな…もう飽いたぞ。」

クレーター側面に縫い付けられ尚を抗おうとするアイオーンを青年を見下しながら宙に佇む、リベル・レギスとマスターテリオン

その瞳はすでに彼らに興味を失っていた。。

しかし、何か思いついたようにその神が創造した端正かつ精緻な貌が愉悦で歪んだ。

「ふむ――――――――最後によい余興を思いついたぞ！！」

リベル・レギスの胸が左右に開き内部機関が露出しそこに黒い光球が携えられていた。

それは光さえ飲み込んでしまう超重力の渦、混沌と煮え滾る闇の井

戸…ブラックホール

リベル・レギスはその腕をおもむろに自分の胸にある光球に突っ込み何かを引きずり出した。

「なんだ――――それは――――――――」

見上げるアイオーンの瞳に移ったそれを見て青年は惚けたように聞き返した。

紅い鮮血を頭から被った機械神が手に携えるのは

「――――シャイニング・トラペゾヘドロン――――」

それは捩じり曲がった神柱のようであり、狂った神樹のようであった
或いは刃のない神剣か――――
闇の極限、光の極限――――在り得てはならぬ矛盾の結露
シャイニング・トラペゾヘドロン、それは癒すもの、それは壊すもの
の、それは変容させるもの
それは匣――――宇宙を、世界ひとつを――――邪神アザトースという
世界を丸々収めた匣だ。

「これぞ余とリベル・レギスの窮極呪法兵装にして大十字　九郎がとデモンベインが何時(いず)れたどり着く極致――――――貴公が決してたどり着くことの出来ぬ境地ぞ」

光悦とした声色で語るマスターテリオン、まるでその時が待ち遠しくて堪らないといった様子で

「そしてこの神具の構成材質は――――即ち世界―
つまりは――この剣は世界を裂く剣！そしてリベル・レギスの魔導機関エンジンはすべての時間と空間にも繋がる我が父君の影の一形態…即ちこの神剣にリベル・レギスの時空に干渉する神力を注ぎ込む事によって！！」

リベル・レギスが虚空を一閃、空間が…いや、世界が切り裂かれた。
そして、世界に亀裂を生み出したリベル・レギスはアイオーンの貌を掴み宙に持ち上げる

「一体…何を……」

「見るがいい、この空間に奔る亀裂の向こう側こそ第二魔法を求めてやまぬ者たちの新天地、無限に連なる世界――平行世界ぞ！！」

リベル・レギスのアイオーンを掴む感触を手に受けマスターテリオンの精緻な貌が愉悦で歪む。

「即ち、この向こう側は如何な世界にたどり着くかは判らぬ。当然、

この亀裂の向こうからこちらを特定することは不可能――――つまりは一方通行の未知なる路！！これが余を楽しませた礼だ受け取るがよい！！！！」

アイオーンを掴んだリベル・レギスはアイオーンをその亀裂に投げ込む。

「貴様あああああああああああっ！！！！」

すでに満足に動くことさえ出来ないアイオーンと内部の青年はその世界の亀裂に抵抗することさえ出来ずに飲み込まれていく

「余に復讐することできず虚無に絶望に浸りながら異界で朽ち果てるががいい東雲　亮！！！」

虚空に奔る亀裂に吸い込まれていくアイオーンを見据えながら宣告するリベル・レギス。
しかし――――

「マスタァァァァテリオォォォォォォォォォォォォォォン！！！！」

アイオーンが青年が最後の力を振り絞り唯一残った右腕から魔力で編まれた蜘蛛の糸を伸ばしそれがリベル・レギスの左腕に絡みついた。

「貴公！往生際が悪いぞっ！！！」
「接続（ハッキング）っ！ナアカルコードによる暗号解読！機構解析っ！！」

紅い燐光を放つ蜘蛛の糸を回線としリベル・レギスの左腕に内蔵された必滅奥儀・ハイパーボリア・ゼロドライブの機構とそれを稼動させる術式を瞬時に解析、複写を行う。

「二進数符号変換！電信形式転送――――目標、地球！！！」
「貴公…真逆っ！？」

解析されたデータが地球へ電波の波に乗のり転送されると同時に驚きに染まっているであろう仇の貌を思い浮かべ青年の口元に微笑が浮かんだ。

「いいか、覚えておけ！貴様等がどんな力を振るおうと其れが力である以上！いつか必ず別の力に蹂躙される、其れが力というものだ！！！忘れるな――――――――ナイアルラトホテップっ！！！！」

眼前の鮮血の神が右腕に携える神剣を振り上げる。

そして其れが振り下ろされ青年をこの世界に唯一つなぎ止めるものである蜘蛛の糸が断ち切られた。

「覇道　鋼造……いや、大十字……九郎！！後は任せたぞぉぉぉぉぉ……」

ぱっくりと大きな口を開いた虚空に穿たれた世界の亀裂が漆黒の機神を飲み込んだ。
今度こそ青年と生命永劫（ロゴス・アイオーン）の名を冠した機械仕掛けの神はこの無限螺旋より排斥されたのだった。

「くくくくく…あはははははははは…はーはははははははははは――――――――――――っ！！！！」

残された煮えたぎる溶岩の紅き泉の真上で虚空に佇む紅き機械神の胸のハッチから乗り出した金髪、金眼の獣は嗤う

「貴公はどこまでも余を楽しませてくれる！？貴公の足掻きは魔を断つ剣に新たな力を齎す、これほど愉快なことはないぞ！！全く…感謝に絶えぬぞ、東雲　亮！！！！！」

己の光を発さない金髪を？き揚げながら紅い星の天空を眺め獣は嗤い続けていた――

同時刻、アーカムシティ覇道邸

「ミスター覇道…」

デスクの椅子の背もたれに身を預ける４０頃の男性の名を呼ぶ老人

「惜しい人物を亡くした…しかし彼がその復讐の最後に我等に齎したそれを無意味するわけにはいかん！！」

覇道の手にはプリントアウトされた設計図と魔術術式がある。先ほど火星から電波で送信されたものだ。

何かを心に己に魂に誓い覇道は勢いよく立ち上がる。

「アーミティッジ！デモンベインに組み込むぞヒラニプラシステム……彼が残した魔を断つ剣最強の武器となるであろうレムリア・インパクトを…それだけが彼に…いや、彼等に報いる唯一の方法なのだから」

そして彼はかつて自分と共に戦った愛機にその手に握られた呪法を元に新たな力を授ける。

その最後の機構にも稼動術式にも関係ないただの一言、消えた青年

が最後に残したその言葉を頼りに

その言葉とは…

「負は有限、されど正は無限か…東雲、貴様のお陰で奴に対抗する最後のピースがそろう。
　見ていろ我々は決して折れない、我等の魔を断つ意思こそが剣なのだから」

ウェルト

どこまでも広がる暗黒の大海、しかしその暗黒の大海は無限とも思えるほどの星久の輝きに満ちた星の大海である。

その内の輝きの一つ、漆黒の海に浮かぶ小型の恒星たる太陽から適度に離れた青い多くの水と命を内包する星の衛星軌道上にて怪異が発生する。

空間有り得ざる内側から破裂し、其れが排出、排斥、排除され真空の空に投げ出される。

それは人か神か、五体を備える人型…しかし、人を象るには余りに巨大で無機質であり不完全

ならば神であるか？

否、その答えは否しか有り得ない。

なぜなら神は完全無欠でなければならずその存在は完全無欠には程遠い、人で言えば死に体だ。

貌を被っていた装甲は砕け、その素顔が露出し、左足は途中からなく、右肩は砕かれ、左腕は肘から先が消失しその胴も大きく抉られている。

そして元は人ならず五体を備えし存在である神を象ったのか存在する蝙蝠のような、竜のような機械仕掛けの紅い双翼は虫食いだらけでその機能を失っている。

鋼の巨人はその機能（いのち）を消そうとしている。

力なく真空の海を漂い水銀の血液と紫電を撒き散らすそれは自分に干渉するあらゆる力に対抗する術を失っている。

ゆえに物質同士を引き合う万有引力に逆らうことも出来ずに徐々にだが加速しつつ最も近い天体である水の惑星へとひきつけられていく。

やがて、大気との摩擦熱により真っ赤に染まりながら機械仕掛けの神はその惑星、『ウェルト』の青に呑み込まれて行った――――

昔、昔――――遥かなる太古、この世界に幾柱もの神が降り立った。

しかし、それは皆が皆思い浮かべるような神ではない。自分たちの欲望のままに他者を貶り蹂躙する悪なる神、邪なる神――邪神だ。

空が、海が、大地が、星が、其処に住む全ての生命は嘆き悲しんだ。

救いを求め叫んだ。

そして――――その声に応える神が燃える五亡星を背負い舞い降りた。

その神は機械仕掛けの神、あらゆる不条理を更なる不条理を持って弾劾するデウスエクスマキナであり

その神は白く煌めく装甲に身を包み正しき怒りの元、不条理を排斥する神剣を振るった。

しかし、多勢に無勢――――その機械仕掛けの神は何度も膝を着き敗北するが決して諦めずに戦い続けた。

邪神たちはそんな神に恐怖した、他者のために傷つき血を流しながらも刃を振るう彼の強さが理解できなかったからだ。

やがて、その機械仕掛けの神は邪神全てを世界の各地に五亡の星を刻みつけ封印しこの地を去った。

それから数億の時が流れ、地表に人間が生まれ文明が築かれた。

しかし人間は闇と光の間に産み落とされた孤独な子供……邪神達は人間の悪の側面に目をつけ自分たちの復活を行わせようと干渉を始めた。

そうした邪悪な意思を持った人間たちのせいで何柱かの邪神が復活してしまう

しかし、悪の人間がいるように当然逆の存在がいた。

彼等、光の民は地下より湧き出た命の源である液体、シムゾニアを用い星の記憶を垣間見た。

――――そして彼らは辿り着いた、邪神を打ち倒す魔を断つ剣を、機械仕掛けの神とそれを駆る人間の姿に

その勇姿に彼らは希望を見出し他の亜人種と協力し四体の神をその模造品を作り上げた。

木を司る――――青竜

火を司る――――朱雀

水を司る――――玄武

地を司る――――白虎

古の機械神を”金”とし彼らが携えていた印、破邪の力を持つ印、五亡星に世界を構成すると思われる元素を当てはめ、元素を司る神を象り彼等の力を宿した神を生み出したのだ。

そうして生まれた四体の機械神は選ばれた乗り手と共に邪神達とその元に下った人間とその配下の異形と死闘を演じた。

それは神話の再現である神話であった。

機械神とその乗り手たちの決死の戦いの末、邪神達は再び地の底へと封じられる。

なぜなら、彼らもかつて自身が敗北を記した神と同じ強さを秘めていたからだ――――

邪神達が封じられた後、機械神は世界各地で眠りに着き邪神達の暴虐に対し団結した人類は復興と確執から各々別々の大陸へと移り住み再びその結束は解かれた。

そうして世界は更に数億の時を重ねたのだ。

――――これがこの世界に伝わる旧い旧い御伽噺、

だからこの世界に住む人々は天に祈りを捧げる。希望を齎した旧き神に感謝を、命を賭け戦い抜いた英雄たちに尊敬を

今も世界のどこかで眠る、機械仕掛けの神が再び世界を護るために

目覚めることを祈るために

今日は収穫祭、村の収穫を祝う一年に一回だけのお祭り。

恵みを齎した星に、安寧な生活を送れるように戦った英霊に感謝を捧げ、自分たちの苦労をを労う為に

祭りの騒々しさを他所に夜空を見上げ想いを飛ばす。

――――――私は此処に居ます――――――

その瞬間、夜空より流れ星が飛来し山に衝突した。

人物紹介

東雲　亮

「世に鬼在らば剣鬼となりて鬼を断ち、
　世に悪有らば悪鬼となりて悪を討つ――――機神召喚」

身長１７５ｃｍ
体重７５ｋｇ
武装：ネクロノミコン・ギリシャ言語写本、霊刀・出雲守永則　刃長４尺７寸８分（約１．４５ｍ）

日本人、少々癖毛で前髪が若干はねていて額に髪がぬれてもくっ付かない、色素若干薄く瞳の色もブラウン

正義漢ではあるが物静かで孤高にして大胆不敵。他人には無愛想しかし時より情も見せる

テオドラス・フィレタス執筆のネクロノミコンギリシャ語写本を用いて魔道書とデウスマキナを失った大十字九郎こと覇道　鋼造の代わりにブラックロッジと死闘を繰り広げていた魔術師

恋人をマスターテリオンに陵辱はてに殺されており復讐の為に闘う守護と復讐の狭間に存在するもの
非道を行った相手には無常冷徹な態度で弾劾する。

結局、マスターテリオンには勝てず平行世界に飛ばされるが最後にレムリアインパクト開発の切欠を残す。

人外の神の血を引いており半神であるマスターテリオンに一歩及ばずながらも対抗できたのはそのためである。因みに東雲　亮は意訳すると明けの冥星となる。
ちなみに実年齢は６９歳だが外見は２０～１８であるためアトイに若作りと言われ閉口した。

戦闘においてはあらゆる古武術をによる剣術と剣術ゆえに体得した幾つもの超感覚（危険察知、未来予知、未来変動等――――）を以て魔導書に記されたあらゆる魔術および兵装を使いこなし闘う。
また存在の絶対方向性、起源は理解することであるため解析魔術・探査魔術は独力行使を行えるほか魔刃鍛造の術式との相性は抜群に良い、さらに流の属性を持っているため流れるモノに関係する魔術適正も高いクトゥグアの場合は熱流制御から適性を示した。（逆に流れないモノ、魔獣召喚など何かを使役したりするものとは相性が悪く使えないそのため神獣弾は使用不可）

魔導書、ネクロノミコンギリシャ語写本は最初に複写されたネクロノミコンであり、原本アル・アジフについで力を持つ、またネクロノミコンの題名がつけられたのはこの本以降でありそういったいみで原書の死霊秘法と呼べるのはこの本だけである。

ギリシャ言語写本をラテン言語に書き写したものがミスカトニック大学に保存されているものでありデモンベイン本編以前のループで最初九郎が使用していたのは此方（マスターテリオンの「ほう、此度はミスカトニックの魔術師ではないのか…」その他多数から）

またラテン言語写本から再びギリシャ語に翻訳されたものもあるがそれとは別

以下はラヴクラフトが記した資料「ネクロノミコンの歴史」の中で言及されている来歴であり、多くの作品中で事実として踏襲されている歴史である。

７３０年　アブドル・アルハズラットにより、アラビア語の原書「アル・アジフ」が書かれる。

９５０年　コンスタンティノープル（ビザンティウム）のテオドラス・フィレタス（テオドールス・ピレータース）により、「ネクロノミコン」の表題でギリシャ語に翻訳される。（東雲所有の魔導書）

１０５０年　総主教ミカエルにより、焚書処分にされる。

１２２８年　オラウス・ウォルミウスにより、ギリシャ語版をもとにラテン語に翻訳される。

１２３２年　教皇グレゴリウス９世により、ギリシャ語版・ラテン語版ともに出版が禁止される。

１４ｘｘ年頃　ドイツでゴチック体版が刊行される。

１５００～１５５０年頃　イタリアでギリシャ語版が出版される。

１５６０～１６０８年頃　ジョン・ディー博士により、ラテン語版をもとに英語に翻訳される。なお「ダニッチの怪」での描写によれば英語版は製本されず、後に不完全な写本が散逸したとされる。

１６ｘｘ年頃　ラテン語版をもとにスペイン語に翻訳される。

１９ＸＸ年、覇道とミスカトニック教授の面々の協力によってデモンベイン制御用魔導書、機械言語写本が保存されていたラテン言語

写本を基に製作された。デモンベインの神気を受け続けたせいで１０年足らずで化身できるようになった他、コンピュータ制御の機械にデウスマキナの能力を付加できるというロボット系作品に置けるチーとアイテム存在となっている。…これが公式設定だからすごい

イリス・ゲインズブール

身長１５６ｃｍ
体重４５ｋｇ

「あなたは何処に生きたいですか…？」

長い髪を首元で束ねた位置の低いポーニーテイル、青い瞳を持つ。

異世界に流れ着いた東雲が最初に出会う少女、年齢はおそらく１４、５　アトイという医者老婆のもとで共に暮らしつつ薬学等を習っている。

天涯孤独な身の上であり出生も不明な点が多い村娘、不思議な空気を纏っており、時折核心をつく言葉を発する。

普段は結構うっかり、おっとり、利発的という矛盾を内包しまくった性格

イリスは虹の意味

アトイ

アイヌ語で海というアト゜イを言い辛いので゜をのけただけ

知識が豊富で村の医者と薬剤師を兼業している老婆、生命力を一時的に回復させる薬湯を作れ東雲の命を繋ぐ

息子がいたらしいが詳細不明、イリスを実の孫、もしくは娘のように思っており厳しくとも優しく接してつつ自分の知識を伝えている。

アルマデル・ネストリウス

イリスの兄のような幼馴染の人物、数年前に強さを得るために村から出てそれ以降の消息は不明

足跡…

山間に奔った凄まじい地面を揺るがす衝撃を生み出したそれは山間に穿たれたクレーターの中央で高密度の蒸気の中に膝を着き佇んでいる。

「…ぐ……俺は……」

満身創痍の機械仕掛けの神の内で其れを駆っていた一人の青年が呟く年は２０前後だろうか、全身に張り付く漆黒のボディースーツ其れは幾重にも薄い何かが重なり構成され幾何学的な構造となっていた。そして銀色の頭髪と紅く輝く左目が印象的だろう。

「…アイオーン」

青年が自分を乗せる機械神の名を呼ぶ、すると脳裏に数多の情報が駆け巡る。

――損傷率６４％――――

――呪法兵装損傷なし――――

――霊燃機関、損傷率６９パーセント

出力、２０パーセントにダウン稼動不能――――

――危険、危険――――

――機体損傷による誘暴の危険性大、機神送還の推奨――――

「機神送還…」

警告に従いアイオーンを送還する。
アイオーンの機体が幾重にも奔る魔力で編まれた環状魔方陣に包まれる。
まるで繭に囲まれるようにアイオーンを囲ったそれは一瞬でアイオーンを分解、ただの情報の固まり、ネクロノミコンの圧縮記述として収納する。

消え入る巨体、そのあと宙に浮く黒い翼と蒼炎の翼の二対を広げ宙に佇む青年
彼は羽撃たきクレーターの端へと移動するとゆっくりと降り立ち地面に足をつける。

その直後、彼の体を覆っていた衣服が弾け無数の本の断片（ページ）が紙吹雪のように宙を舞い彼の手に殺到するように集い一冊の古書となる。
更には青年の銀色の髪は正常を取りもどすようにやや茶を帯びた黒髪へ、赤い左目は右目と同じブラウンへと変貌する。

「ふぅ……ガハっ――――――」

深いため息を点く青年、すると彼の口から大量の鮮血が吐き出される。
人外の理論の顕現とその行使、更にはマスターテリオンとの死闘によって彼の心身は弱り果てていた。

己の命を維持できないほどに

特に最高位に位置づけされるデウスマキナ、アイオーンはその強さに比例するだけの代償を強いる。

「ガハっ！…ゴフっ……！！！」

咳き込むたびに口から鮮血が抑えた指の間から漏れでてくる。そして漏れでた赤は滴り衣服と地面を朱に染めた。

フラフラと覚束ない足取りでアイオーン着地の衝撃で巻き起こった暴風に負けず立っていた樹に背を預けると両足から力が抜けその体がずり落ち地面に腰をつける。

「少々…限界を……超えてしまった…よう…だな……」

樹に背を預けたまま天を仰ぎ見る。
其処には煌めき輝く星雲の大海、スターオーシャンが広がっていた。

――――もう一度、もう一度…君と同じ空を見たかったな――――

胸に残ったのは後悔でも絶望でもないただ郷愁にも似た切ない痛みだけ。
憎しみが消えた訳でも、絶望が癒えた訳でも、空虚が埋った訳でもその何れでもない、今でもハッキリと覚えている

最愛の人が穢され、奪われたあの時の絶望を、彼女の亡骸を抱きしめながら己の蒼炎で無に還したその感触を

仇（ティベリウス）に憎しみの侭永劫に続く死の苦痛の呪を、幾ら他者の肉を獲て再

生しようが即座に肉体が生きたまま腐敗し停止する呪いを刻んだ。
その後、全ての元凶であるマスターテリオンを追った。

結局、仇を討つことは叶わなかったが――

――もう、十分だろう――

やがて何時か現れる、全ての意志を継ぐ存在が奴等に破滅を齎す。
絶対的な悪意は絶対的な悪を憎む憤怒という力に蹂躙される。

奴らが他者を踏み躙ったが故に生まれる存在に奴らは敗れるのだ。
意思が力である以上これは必然の理

自分は正しき怒りを宿すその存在に道しるべを残せた筈だ、ならば俺の役目はココまで……

「今、帰るよ……佐奈……」

異界に死した魂が帰れるかは判らない。でも、陽灯の中で微笑む君が見える…
そんな気がする――
幸福とは掛け離れた路だったけど、君がそっちにいるのならきっと報われている。

――俺は自分の命を無下にしていたけれど精一杯生きたよ…

だから…もう一度君を抱きしめていいかな？

――――

青年は異界の地で愛しい人の笑顔を瞼の裏で描きながら目を閉じる。
その顔は安らかであり眠っているようにも見えた――――

出会い

――ここは…？――

不意に意識が覚醒する。
瞼を開けるとそこには木で作られた家屋の屋根が囲炉裏の炎によって赤く揺らめいていた。

どうやら自分は床に敷かれた布団に寝かされていたようだ。

「あ、目が覚めたんですか」

囲炉裏の傍で火にかけられていた鉄鍋の中身を回していた日本のアイヌ民族のような衣装に身を包んだ少女が僅かな物音から青年が目覚めたことに気づく
少女は首元で束ねられた黒い長髪を靡かせ振り向く

それに向き直るため青年は体を起こそうと腹に力を込めるが

“ビキィィィ――――――！”

「ぐ…！」

体中に響き渡る稲妻にも似た痛みに顔を顰め体を布団に投げ出す。

「まだ動いちゃダメですよ！ひどい大けがでずっと眠ったままだっ

たんですよ！！」

先ほど起き上がろうとした際に崩れた掛布団を直しながら青年を覗き込む少女、そのブルースフィアのように透き通った輝きの青い瞳の視線が青年に注がれる。

「…俺は生きているのか……？」

「はい、もう峠は越したそうですから大丈――――「なんでだ」え？」

安心させようと紡ぐ少女の言葉を遮り何かに訴えかける青年
彼は、悲しそうな切ないような目を晒す。

「俺は…なんで生きているんだ」

それは疑問ではない、死ねなかったそういう意味が込められていた。
やっと、愛しき人の元へと逝ける。そう思った矢先に自分は未だ生に囚われていた。

「生きる意味を失い、やるべきことも終え、生も終えられたそう思ったのに…」

「生きる事が辛かったのですか……？」

独り言を漏らす青年に思わず問いかける。彼の話を解釈するのなら彼は死に場所を探していたそういうことになる。
ただぼんやりと屋根を眺めていた青年のブラウンの瞳が顔を覗き込

む少女の顔をとらえる。

「どうだろう…な――――ただあの時、消え逝く意識の中で肩の荷が降りた…そんな気がした」

自分は何故、こんな見も知らない少女に馬鹿正直に心境を語っているのかと疑問が溢れるが何故か素直に語っていた。

――――誰かに聞いてほしかったのかもしれない――――

「なら、生きてみませんか?せっかく荷物を降ろせて自由になったんですから、生きて世界を見て、生きたいと思う理由を探してみませんか?」

そう言って少女は微笑む。

その顔はひどく……

キレイに見えた

「君の名前は何と言うのか教えてはくれないか……?」

そう問いかける少女は一瞬キョトンと呆けたかと思うと口元に手を当てクスリと小さな野花のように微笑むと己の名を告げる。

「はい、いいですよ。

私はイリス…イリス・ゲインズブールです……あなたは誰ですか?」

「俺は亮……東雲　亮だ。

イリス…虹か――――きれいな名前だな。」

「あ、ありがとうございます」

己が名前を褒められ僅かに俯きほほを朱に染める少女
その様子を目に微笑を一瞬……ほんの一瞬だけ、浮かべる。

（あ、この人……今、笑った）

目を覚ましてからずっと無表情だった彼が不意に見せた笑顔に少し安堵の息をつく。
病は気からというように本人に生きようという意思がなければ何時までたっても容態はよくならない。そういった人間は全く心から笑わないものだ。

「ああ…少し眠くなってきたよ……」

うつらうつらと瞼を開け閉めする青年、体力は未だ完全ではなく睡魔が彼を微睡（まどろみ）の世界へと誘う、その様子を少女は優しげに見つめる。

「はい、おやすみなさい」

どこか安心感を誘う懐かしい声色を耳に亮は眠りへと堕ちて行った。

老医者

再び意識が浮上し瞼を開く
すると布団のすぐ傍の壁に設けられた明戸から差し込む陽光に目を細める。

「――気が付いたか？」

声のしたほうに頭を向けると皺を顔中に刻み白く染まった頭髪を携えた老婆があの少女と同じように囲炉裏に掛けられた鉄鍋をかき回しながら問いかけた。

「――あなたは…？」

「儂の名はアトイ、知識にものを言わせて医者等をやっとる。
主は数日前に星が落ちての、山火事などの影響を調べに行った若い衆が見つけて担ぎ込んで来たんじゃ」

老婆は収穫祭の夜に起きた出来事を簡単に語り、鍋の中身を一掬いしその中身口に含むと満足げに肯く。

「――でお主何があったで？体の熄(き)がかなり弱っておった。吹けば消えてしまいそうなほどにのう？
まるで風前の灯火そのもの…普通じゃまず考えられんことじゃ」

「……」

沈黙を守る、魔道は秘匿しなければならない力。
鬼械神　アイオーンの動力機関アルハザードのランプは術者の生命力を燃やし原動力とする霊燃機関、並の人間であれば精々5分も動かせば命に関わる。それ故に生命力が枯渇し組織が崩壊したのだ。

「……何も言わぬということは訳ありか……まあ良い、じゃが――大丈夫とは思うが儂が貴重な秘伝の薬湯を使って漸く拾った命じゃくれぐれも無下にせんようにな…あの子、イリスが悲しむのでな」

「――俺がどうなろうが貴方たちには関係のない話だ」

未だ布団から動けないので天井へと視線を向け、冷たく言い放つ
それに対し老婆アトイはまるで悪戯っ子の悪戯を笑うように大声で笑いだす

「カーカカカカカカっ！！！！！！
確かに関係の無い話じゃろうて――だがな、主は自分から死を選ぶことはできん。
違うかの？」

「――何故そう思う？」

「分かるわ……儂は今まで数えきれんほど多くの人間と出会い別れてきた、その中には当然お前さんみたいな者も仰山おったわ……」

遠い思い出を振り返るように目を細め虚空を見つめる老婆
医者とは救えた人間も救えなかった人間も数多く見つめる職業、悲しいくらいに人間観察に秀でていた。

「お主は死に場所を求めている――――そんな目をしておる。」

「そう、なのかもしれない――――」

辛うじてそれだけを口にする。
壊したかったのは自分から最愛の存在を奪った存在ではなく最愛の者が居ない世界だったのかもしれない――世界が自分にとっての主観世界から成り立っている以上自分は死に意味と場所を求めていたのかもしれない。

「――――だが、それも過去の事だ。」

「ほう?」

「【せっかく荷物を降ろせて自由になったんですから、生きて世界を見て、生きたいと思う理由を探してみませんか?】あの子…イリスがそう言った。そう生きてみるのも悪くないと思う己が居る――――少々戸惑ってはいるが。」

「そうか!そうか!!……何、時間はタップリとあるゆっくり考える事じゃ若いの」

皺くちゃの満面の笑みで大きく肯くアトイ
だが、最後の言葉に微妙な引っ掛かりを覚えた亮は抗議の声を上げる。

「一つ言っておく……俺は――」
「おばあちゃん！ただいま～～～～～！！！」

決定的な一言を口にしようとしたところで玄関から元気な声を響かせてあの時の夜、半ば夢現ながら言葉を交わした少女、イリスが幾つかの薬草の入った籠を抱え飛び込んできた。

「これでも４０はとうに超えているぞ」

「ほっ！？」
「ふぇ？」

続けて発せられた亮の一言に固まる一同
そんな中で自分が割り込む会話の前後を脳内でつなげたイリスが恐る恐る問いかける。

「し、東雲さん……もしかしてそれって年齢でしょうか？」

「ああ、俺は君の数倍は生きているぞ」

「ふぇ…ふぇえええええええええええ――――――――――――っ！？」

少女の叫びが村中にそれはよく響いたそうだ…

そして数分後――――

「うう～～～申し訳ありません～～～～～」

病人のいる部屋で大声を出したイリスがアトイに正座させられお仕置きを受けていた。
足が辛いのかプルプル震えながら目から“るる～～～”と棒のような涙を止めどなく流していた。

「全く！お主はちっともお転婆が治らん！！」

それを憤慨した様子で文句を口にするアトイ、大概こうなれば日頃

の一寸した鬱憤まで吐き出さないと老婆の怒りは収まらない。
こういった事柄に世界の壁は意味がないようだった。

「――それぐらいにしておいたらどうだ？そのぐらいの年齢（とし）ならば当たり前だと思うが――」

「東雲さん！！」

まるで魔王の城から囚われた姫を救い出す勇者を見るかのような視線を亮に注ぐ少女（イリス）

「怪我人は黙って寝ておれっ！！！」

しかし、老婆の厳つい睨むだけで深き者どもを一掃できそうな視線に思わず慄く
が、なけなしの体力と気力を総動員して何とか援護射撃を行う

「俺は――彼女の明るい態度は彼女の長所であり無理にお淑やかになると彼女の魅力を損なうと思うのだが…」

「ほう、モノは言い様じゃな…確かに無理に変えようとして変える物でも無いのぉ…」

「ありがとうございます！！」

矛を収めた老婆に安堵の息を漏らしながら亮にお礼を言うイリス、

そんな彼女の様子に老婆はやれやれとため息を吐く

「さて、怪我人よ腹は減っておらぬか？」

「――――それなりには」

何か嫌な予感を感じる。

動かない体、当然手も動かず一人で食事を行うのは不可能だ。

つまり――――

「そうか！そうか！

イリスや、彼の食事を手伝っておやり、おじやはもうできておるのでな――――」

「はい、おばあちゃん分かりました」

手慣れた手つきでお椀に鍋の中身を装ったイリスはお盆に乗せ自分の枕元に移動すると一旦、それを床に置き自分の体を起こすのを手伝ってくれる。

「どうですか？体、痛みますか……？」

「いや、大丈夫だ――――ただ、体に力が入らない」

「仕方あるまい、お主は命が生きるのに必要不可欠な熄をギリギリまで消費し尽しておった、持ち直したとはいえお主の体を動かすには損なった分が圧倒的に足りておらぬ」

亮自身の容態を説明するアトイ、それを聞いたイリスは「じゃあ、元気になるためにちゃんと食べないといけませんね！」と張り切り一口お椀の中身を蓮華に救うと息を吹きかけ冷ます。

「はい、あ～～～ん」

差し出されたそれを思わず凝視してしまう。

「？どうしたんですか」

首をかしげるイリスだが、亮は嫌な予感が現実になったと頭を抱えたい衝動でいっぱいだった。――――要するに恥ずかしいのだ。

「カカカカカカカカ！！
なんだ照れておるのかえ？随分と初心じゃのう？」

からかうアトイに苦虫を１００匹まとめて噛み潰したような顔をする亮
それにイリスが俯きしょげるように言葉を発する

「やっぱり、私じゃだめですよね……」

自分がやることに不満があるのと感じたイリスの悲しげな表情が亮の良心に突き刺さる。
その奥で何やらニヤツいている老婆に軽く殺気の籠った視線を注ぎながら口を開く

「――――そんなことは無い……食わせてくれ」

「え…ハイ！」

差し出された蓮華の中身を口に含み租借し飲み込む

「どう・・・ですか……？」

「……うまい……」

「よかったぁ」

タップリと時を要して口にした感想に、微笑み喜ぶイリス

亮は口に広がる懐かしい風味に少しだけ昔に戻れたような奸悪を抱く

「じゃあ、次いきますね」

「ああ、頼む……」

無愛想な表情の青年を笑顔で介護する少女とそれをニヤニヤしながら見守る老婆といった珍妙な光景が展開されたのだった。

路

「呆れた回復力じゃのぉ…儂の見立てでは最低一か月は寝たきりじゃったのに」

「……何時までも寝ている訳にはいかない」

掌を握ったり開いたりを繰り返し自分の肉体の感触を確かめる亮に老婆アトイが呆れた声をあげる。

――魔術、竜魂覚醒はしばらく無理か――――

生命は少量の生命力を基に魂がより多くの生命力を生み出すことで維持される。そして魔力はその生命力を魔術回路が魔力に変換することで精製されるため生命力の貯蔵が十全でなければ初歩の魔術行使とて命に関わる。

――――何より魔術の使用は術者の正気を削る。

故に魔術師は自分で心の依代となる希望を見出し適切な力を行使する心の強さが求められる。だが、発狂は免れようとも力に魅入られた心弱き力に酔う魔術師も多いそういった者どもが悪虐非道を行うのだ。

そういった魔を刈るために魔なる力を行使するもの――――人それを“ホラーハンター”と呼ぶ。

さらにその中でも最強の存在こそ、世界最強の魔導書を所持する宿命を背負う者

――人は彼等をマスターオブネクロノミコンと呼ぶ――

「ふむ、衣服が必要じゃの……少し待っておれ」

思考の海に沈んでいた意識が外部からの干渉によって浮上する。
浴衣にも似た衣服姿の自分を見てそう言い残す暖簾が掛けられた奥の部屋へとその姿を消していくアトイ、おそらくは物置なのだろう。
そして数分の時間を要して奥から出てきた老婆の手には着物のような服がありそれが亮に渡される。

「息子のものじゃが恐らくお主にも合うはずや」

広げてみるとそれは剣道の道着によく似た袴がある、形状がほぼ同じため着け方も同じようでありそれを着込んでいく。
道着の裾に腕を通し、帯を締めそして袴をはく

「ほう、慣れておるのう？」

「おばあちゃん、ティルスさん所の子供が熱を出したから見て欲しいって…東雲さん、その恰好……」

不意に後ろの玄関から入ってきたイリスに向き直ると自分の恰好をみたイリスが硬直しているのが目に入る

「――――何か変か？」

聞き返すと彼女は無言で首を左右に振る。首元で束ねられた髪が馬の尻尾のように遅れて揺れている。

「ん～～～っと、なんか様になっているって感じですね――――なんかしっくりきます」

「そうか」

口元に人差し指を充てながらしげしげと亮の全身を眺めるイリス、そんなイリスにアトイが語りかけた。

「これ！イリスちゃんと伝えることを伝えんか！」

「あ、そうだ！さっき卵をもらいに行ったときティルスさんの奥さんが子供が熱を出したから見て欲しいって言ってました」

注意を促すアトイに思わず口元に手を当てた後、その時の様子を説明するイリス。

存外、うっかりな性格のようだ。

「うむ、それでは儂はこれから準備をしたらティルスの所に行くとするわい…イリスお前さんはその若作りが体を慣らすついでに村を案内しておやり」

――若作り……――――

「分かりました！」

アトイのさり気無く胸に突き刺さる言葉に傷心な亮をよそに元気よく返事をする黒髪の少女、その横で閉口しつつ脳内で自分を指す単語を反復する亮

――若作り……――――

……存外、心の傷が深いようであった。

「大丈夫ですか、東雲さん？」

「ああ」

右手で杖を突きながらその体の反対を支えるイリスの問いかけに素っ気なく返す。

二人はまず村が一望できる小高い丘に続く道を歩いていた。舗装などされていない地面の左右にささきが生えるむき出しの道に沿って澄んだ清水の流れる小川が通り陽光に小魚が煌めいて映る。

サラサラと小川の流れる音が、草茂斜面を舐める風が、揺れる木の葉の音が、穏やかに暖かく降り注ぐ陽光が心地よい

「……此処の空気は心地いいな」

「はい、私もこの道の空気が大好きなんです。
春には穏やかな空気と一緒にささきの桜が舞って、夏には色んな命が生を謳歌し、秋は静かに別れを告げる少し物悲しい紅葉に彩られて、冬は静かに次を待つ命たちを白雪が覆う…其のどれもがとてもキレイで、とても大好きなんです。」

慈しむような目で語るイリスに対し亮は遠い悠い何処かを幻視する視線を以て言葉を口にする。

「――――そうか好きな場所がある、それはとても幸福なことだ。その感情を大事にするのだな」

自分が居たかった場所には帰れない、帰っても生きたかった場所は

すでに存在しはしない――――ならば異界であろうとなかろうと関係なく己は永遠の迷子という流浪人なのだ。

「東雲さん……？」

思わず自分が半ば担いでいる存在の顔を見上げる。
何とも言えない失ってしまった何かを幻視するその表情は憂いと切なさを帯びている。
まるでその様子は水面（みなも）に写り揺れる月の如く、触れれば壊れてしまいそうな氷の彫像のように儚く感じる。

「……どうかしましー――」
「おっ！！イリスじゃねーか！！！」

「バルドルさん！」

イリスが意気込んで亮に問おうとしたその瞬間、道の向いからよく通る大声で彼女を呼びかける男性が現れる。
徐々に近づいてくるその男は身長１９０ｃｍに迫るほどの巨漢であり、肩に斧を担ぎつつ巨大なイノシシの体を引きづっている。
恐らくは猟師か樵（キコリ）なのだろう、厳つい顔ではあるが人のよさそうな陽性の笑みを携えている。

「バルドルさん、おはようございます。わぁ！今日は大きいですね～～～」
「おうよ！昨日仕掛けた罠を見にったらこいつが掛ってたんだ！今から帰って村のみんなに分けてやろうと思ってな！！」

「あ！じゃあ今日は村中、猪鍋ですね♪」
「そうだなアトイ婆さんの猪鍋は旨いからなぁ、ある程度分けたら大なべで作ってもらうか！……ところでそのあんちゃん誰だ？」

世間話に花を咲かせていたイリスとバルドスと呼ばれた男が若干身を屈め亮を口元に蓄えられた少量の髭を弄りながらしげしげと見つめる。

「～～？どこかで見たことあるような……おっ！思い出したぞ！！お前さんヴァイエルの野郎が見つけて村に運び込まれた怪我人だな！！」

「そのヴァイエルが誰だかは知らないが状況を繋ぎ合せると恐らくそうだろう」

「ガハハハハハハハハっ！！！そうか！そうか！よかったな、あんちゃん元気になれてよ！まあ、アトイ婆さんの腕もいいけどイリスみたいな別嬪に付きっ切りで介護されてりゃ良くもなるか！」

亮の肩を割合強い力で叩きながら大声で笑い、亮の回復を祝いつつイリスをからかう為の冗談を口にする男。
気さくで善人であることが彼の行動の端々から感じ取れる事から友好的な人格の持ち主のようだ。

「バルドスさん！！」

「ああ、彼女はよく看病してくれた――――感謝している」

あくまで、看病に関してだけだがこの言い方がイリスに誤解を誘発させる。

「えっと……ああ、ってことは東雲さんから見たら私は別嬪で……つまりは美人ということで……」

そこまで思考したところでどんな結論に至ったのか“ボン！”と彼女の思考が爆発し頭から湯気が昇りつつ顔が真っ赤に染まりあがる。

「ガハハハハハ！！！暑いね～～～お二人さん！」

「いや、俺と彼女はそのような関係では……」

否定の言葉を口にしようとしたところでバルドスが手で静止を促す。

「いいって、いいって！皆まで言わずとも分かっておらぁ！男バルドス！！下手に口を開いて噂をにしようなんて思ってやいねぇ！！」

「そもそも、俺と彼女は怪我人と介護人以外の関係では――――」

「ガハハハハハハっ！！！まだ秘密にしたいってかアツアツだな！寄り添ってまるで新婚みたいじゃねぇか！！」

「新婚っ！？」

頭の熱暴走から新婚という単語に即座に反応し現実に回帰するイリス、それを見たバルドスがニヤリと笑みを浮かべると何かに気付いたようにイノシシを繋いでいた縄を肩に担ぎなおす」

「――――おっと長話ばっかしてるとこいつの肉が傷んじまうじゃあな！！！！！」

人の話を全く聞かない嵐のような男バルドスは巨大イノシシを引きづり二人の横をすれ違うとあの陽気な笑い声を響かせながら去っていった……

「なんなんだ一体……」

ただ、呆然と繰り返す事しか出来ない亮に対し赤面したまま「新婚…新婚…」とまるで壊れた蓄音機のように繰り返すイリスという珍妙なカップルがその場に取り残されたのであった。

教団と死人

バルドルと別れた二人は歩んでいた路を進んでいく――
途中、幾つかの分かれ道があったがイリスがその都度正しい道を教えるので特に道に迷う等ということはなく、すっかり木々に覆われた道を彼女に支えられながら歩んでいく

「東雲さん着きましたよ」

イリスが言うと同時に森が開け小高い丘へと出る。
そこからは連なる山々とその上空に広がる青空、その澄み渡る空海を凪がれる白雲
そしてもっとも手前の山の麓に存在する集落

「あれが君たちの村か――」
「はい！あれが私【達】の村――【クタニド村】です」

眼下に存在する村…集落、木製の策で覆われさらにその周囲を川から引き込んだ水が流れる堀が存在している。
その中にはいくつかの木造建築物が点在し堀の外には水を引く支流から用水路が作られ畑田とが広がっていた。

「…堀を用水路用の貯水池として使用しそこから水を引くことで農作物を育てているのか効率的だな」

「はぁ～～～東雲さんすごいですね、見ただけで分かるなんて。この辺りは夜になると獰猛な獣が出るのでああして囲って安全に眠れるようにしているんです！」

「そうか」

イリスの簡単な説明を耳にしながら亮は村の名前について思考していた。

クタニド――――偶然か？

クタニド、それは邪神クトゥルーの従兄弟でありながら優しさと強い力を持った善神。かつて邪神を退け封印した旧神（エルダーゴット）のリーダーだ。

そして名前というのは重要だ。

名前は概念を最も強く表す。漠然としたイメージは名を与えられるだけで強固な存在力（リアリティ）を得る。

「……！あれは――――――？」

ふと眼下の集落の正面に設けられた出入口である堀に架けられた橋、そこに奇妙な一団がおり村人達と何やら揉めているようすに気付く。

「あの人たち――――また……」

イリスの透き通る蒼宝石（ブルースフィア）の瞳が不安に揺れていた。

村の門、清水が流れる堀の上架けられた板張りの橋の上で村の門の前に立ち並び目の前の集団を入れないように自分達の体を壁として立ち並ぶ村人たちと幾人かのロープでその身を覆った集団が相対していた。

「改教せよ、皇帝陛下は吾らを国教として定めた、バアシュ教へと改教せよ」

『改教せよ、改教せよ、改教せよ』

先頭に立つ教主らしき人物の後に続く幾人かの男たちの復唱が響く

「もういい加減にしてくれ！正直迷惑なんだよ、何回も何回も！！いきなり来たかと思えば背教になるとか訳の分からないことを言って村のご神体を壊そうとするし、神への捧ものにするって子供を連れてこうとするし、俺たちが汗水たらして作った作物を勝手に持って行っり――――――――もう、うんざりなんだよ！！！」

それに対し村人の一人が叫ぶ。相当の鬱憤がたまっていたため我慢しきれなくなったのだ。

その一言によって村人たちは関が切れたように喚きだす

「そうだ！そうだ！」

「帰れ！還れ！！」

「誰もお前たちの神様に守ってもらおうなんて思わねぇんだよ！！」

土着の神を信仰する地方民と行政が国教を指定したためにいざこざが起きるのは歴史の必然ではある。

しかし村人たちから見ればいきなり来た集団が自分達の信仰する神を押し付け、横暴な行いを我が物顔で行うのだから嫌って当然の話だ。

「あくまで、異教の神を…反逆した偽神を信仰するというのか……愚かな」

先頭に立つ教主が嘲るような声色で呟き、天を仰ぎ高らかに騙る。

「よく聞くがいい！
吾等は聖地浄化の任を負って使わされた使者だ！大地の穢れを清め、すべてを無に帰すバアシュの御業っ！！そして敬虔なる信徒のみが其の後に生まれる新天地に生きる権利を得るのだ！！！」

高らかに叫ぶ教主、その後ろに使えるローブの男たちは祈るように手を合わせ天に翳す。

「改宗し入信せよ、吾らが同胞となり聖地浄化を生き延びるのだっ！！」

――――もうやめてくださいっ！！！――――

男たちの背後から少女の悲鳴が上がる。一同の視線が集団の向こうから少女の叫びがあがった。

そして一同の視線がその声の主へと向く。

「なんであなた達は自分達の考えを押し付けようとするんですか！？なぜ神様が自分を信じていないだけで何の罪もない人たちに死ねと言えるんですか！？――――そんなのは神様じゃありません！邪神（アクマ）です――――」

その声の主、イリスはやはり恐怖しているの小刻みに震える体を意志で必死に抑え訴えかける。

それを見据えた教主は探していたものが見つかったように一瞬目を向くと不敵な笑みを浮かべた。

「異教徒の女…貴様！いうに事欠いて主神たる吾が神を邪神（アクマ）だと？それに……黒髪に青い瞳、そうか貴様がか――――皆の者そやつを捕らえるのだ！そやつは繋がりし者（ワイアード）、バアシュが求めし座であるぞっ！！！」

教主の言葉に従いローブの男たちが動き出す。

「いかん！！イリス逃げるんだぁっ！！」

「逃げてくれ！イリスちゃん！！」

教主の不穏な言葉を耳にした村人たちが逃走を促そうとするが彼女は彼らとはちょうど教団の連中を挟んで反対だ彼女を守る存在はいない。

ローブの男たちの手が伸びる。まるで生者をつかむ死者の腕のよう

に無数に

「ヒッ！」

短く悲鳴を上げる少女、青い瞳に恐怖が映る。

彼女は自分を守護する力を持たず、また守護する存在もいない

――ただ一人を除いて…

「汚猥なる死人よ――――――『彼女に触れるな』

静かに、灼熱の怒りを含めた声色が響くと同時に彼が飛び降りてくる。

そして彼の両足が地面についたその瞬間、その地面が爆ぜとびその姿がぶれる。

“ダァァンっ！！！”

己直後彼はイリスに迫っていた教団員の懐に現れ、地面を砕くほどの反発力を右足を軸にし、回転による遠心力を加えて左足を教団員の腹に向け撃ち出す。

「ぐあああああああああああ――――――――――――――――！！！！」

その一撃は正しく破城鎚、
相手を吹き飛ばすことに重点を置いたため身体内部へのダメージは瀕死程度で済んではいるであろう教団員は後続の教団員を巻き込みまるで、大雪玉が進路の雪を巻き込み大きくなるように後続の人間を巻き込みもんどりうって動かなくなる。

「何奴っ！？」
「……東雲さん！」

背後から己の名を呼ぶ少女の声を聴きながら摩擦熱で焦げ付いた橋の表面から立ち上がる白煙越しに教団を見据える。

「お前たちがどう云う心算（つもり）か一切の興味はない――――が、彼女に指一本触れるのならば決死の覚悟を抱いてこい」

声色からは抑えてはいるが彼のブラウンの双眸からは絶対零度かつ無限熱量の憤怒が漏れ出て、躰から迸る氣は鋭利な無数の刃物のように砥がれ殺気として指向性を持たされ教団員に突き刺さって行く。

「貴様も吾らが神の御心を無下にするというのか」
「チョズン　オブ　ゴットよ、俺は貴様らと会話する舌を有していない、ただ命令を聞くだけの人形に“命令”しているのだ。」

神の奴隷――――チョズン　オブ　ゴット
さて、人と奴隷その違いは何か――――それは生きた者か、生きた物であるかの違い。
狂信とは価値観の選択権を神に全て委ねた存在だ、

それは生きている者と言えるのか――？

否、不、断じて否！！

生きるとは己が意志を持って価値観、行動を決定することを言う、善悪の判断を神にゆだねた時点で彼らは人ではない。

哲学的な死を迎えた死体、生体であるだけの人形だ。

「貴様らの選択は二つ

このまま去り二度とこの地に足を踏み入れないか――――このまま非道を行い俺に断罪されるかの二選択一、どちらでも好きなほうを選ぶがいい」

「――――仕方あるまい、ここは引くとしよう。

だが、忘れるな主神バアシュに許しを請わない者は必ずや非業の最期を迎える。――――それは人類が負った原罪なのだから」

亮の宣告を聞いた教主は天空を仰ぎ見、数旬思考した後に負け惜しみとも、報復を示唆するとも取れる言葉を残す。

そして、教団は先の攻撃で動けなくなった教団員をほかの団員が引きづりながら橋を渡り二人を避けて通り過ぎていく。

そして、その中で一際異彩を放つ教主と亮がすれ違う時亮の口が動く

「一つ教えてやろう、生きる権利などは与えられるモノではない――抗うことで勝ち取るモノだ。他人に生きる権利を与えられたらそれは唯の生きる屍だ。」

教主の視線が鋭くなり亮に突き刺さり、その後ろのイリスへと注がれるがその直前に亮が自身の体で教主の視線を塞ぐ。

「くっ！……行くぞ皆の者！」

逆に突き刺された視線に舌を打つと教主はほかの団員を急かしどこへとなく去って行った。

「あの…東雲さんありがとうございます」

教団が去った後、イリスはおずおずと亮に礼を言う

「……くっ！」

その瞬間、崩れ落ち地面に膝をつく亮の体

「東雲さん！？」

「……大丈夫だ、さすがに病み上がりで無茶しすぎた」

「ふぅ…もう！心配させないでください！！！」

慌てて駆け寄り介護しようとするイリスに無表情ながら答えた亮に安堵の息を彼女が吐く。

急に本来の身体能力全開で動いたためなけなしの生命力と密接に関係する体力を一気に消耗してしまったのだ。

「おう！あんちゃんさすがだな！！！漢らしかったぞ！！」

――――たしかバルドルだったな

歩み寄ってきた村人達の先頭にいたバルドルが見下ろしながらニカッと笑みを向け、それに続く村人たちも肯定の胸を言い亮の健闘を称える。

しかし、そんな声に割り込む声があった。

「お前ら馬鹿か――――！？
本当にこれでいいと思ってんのか！？――――これでアイツら次からは実力行使も辞さないかもしれないんだぞ！！」

村の入り口の門のところに立つ金髪、翡眼の青年、一同の視線がかれに向き直る。
彼の顔は不機嫌そうに鋭い視線を亮に注いでいた。
そして、膝をつく亮に寄り添うイリスがそっと彼の名を告げた。

「…ヴァイエル……」

「――さて今宵、皆に集まってもらった内容は言うまでもあるまい」

クタニド村の中央に存在した集会場、その上に位置するアトイが揺らめく炎に照らされながら集会に集まった面前を見通す。

「その前に一つ聞きたい」

今夜の集会の議題ともいうべき青年が声を上げた。

一同の視線が集中する中、アトイは頷き発言を許可した。

「昼間の奴らはなんだ？――――真面な雰囲気では無かったが」

青年、亮の質問に数旬沈黙するとアトイはゆっくりと語りだす。

「奴らはバアッシュ教と名乗っておる連中でな風の噂によると近頃、凄まじい勢いでその信者を増やしているとのことだ。――それに伴ってか良からぬ噂をよく聞く。」

「よからぬ噂？」

「うむ、死者が黄泉返るとな――――」

自分の質問に頷きながらに答えたアトイが真剣な声色で語った。

死したものの蘇り、それは在ってはならない。

自分もまた彼女に出会えたならば、幸福だと感じるだろうが其れは

在ってはならない。
何故なら死者は蘇らない、天地開闢より定められし絶対の法

無から有は作れない。
ならば消えた存在を構成する因子は何処から来るのか？――――奪うしかない。
己の欲望を満たすためにそれが切実なる叫びであろうと他者を踏みにじって良い理由など無い。――――それは悪だ。どうしようもないほどの邪悪。
――――許してはいけない悪なのだ。それがどんなにそれが哀しくとも、それがどんなに悲痛であろうと赦してはいけない邪悪なのだ。

――――己が断罪すべき悪なのだ。

「この村では未だそのような事は起きてはおらぬが数多くの地方でそのような又は類似する怪異が発生しとると言うことじゃ――――――それもあの教団に入信しておらぬ街ばかりがな…」
「……そこまで来ると出来過ぎに感じるがな」

「…うむ、それでワシ等も慎重にしておったところでこの騒ぎじゃ」

首肯するアトイ
怪異の発生と共に何らかの宗教団体が騒ぎ出すのは歴史の必然ではあるが、何度も
起きればそれは偶然では済まされない。

詰まる所、奴らが担ぎ上げるバアッシュという神を信仰していないから降りかかる怪異から逃れることの出来ないのか――――もしくは

その反対、バアッシュが起こしているのかの二つに一つ
其のどちらかが起きているのだろう。

「……奴らが言っているバアッシュとは？」
「この地方でその名を知っておる者は余りおらぬが……聞くところによると遥かな太古に起きた神々の戦において反旗を翻した神によって肉体を裂かれ、その魂を何処かに封じ込められた古の神じゃ。肉体を失ったせいか貌の無い神…『無貌の神』とも言われておるな」
「――――――！」

無貌の神、その言葉に思わず精神が沸騰した。
心臓の鼓動が耳元で打ち鳴らされ、腸が煮えたぎり、脳が刃物の様に冷却し、視界が血のような赤みを帯びる。

人の世を常に悪しき道に導く黒夜の魔王、混沌の神性をもつ神、造物主（ザトース）の息子にして、完全なる外なる宇宙の神、全てを嘲笑う【貌無き神（アー）】――――

ナイアルラトホテップの異名に純粋な燃えたぎる憤怒を抱いたのだ。
――――が即座に感情を明鏡止水の境地にて制御しその猛りを押さえる。

「――――これどうした？」

一瞬制御を外れた感情を見抜いたアトイが怪訝な声で問いかけた。

「――――何でもない、既に終わったことだ」
「…そうか、そういう事にして置くとするわい」

イリスから何かを聞いていたのかアトイはそれ以上何も言わずに引き下がった。
アトイの隠れた気遣いに心中で頭を下げる。

奴の、マスターテリオンの言葉が真実だとすればこの世界は並行世界、かつて自身が存在していた世界とは隔たれた異世界、仮にそのバアッシュとやらがナイアルラトホテップだとしても自分を戦いに駆り立てる為に運命を捻じ曲げた邪神とは同一にして異質、この世界の奴に復讐したとしても復讐は成立しない。――己の心も晴はしない。
何より無限の貌、即ち無限の存在をもつ奴を殺しきる術を自分は持たない。

「――――では本題に戻るぞ」

アトイが再び集会場に集まった村人たちを見渡しながら問うた。

そして約1時間後、集会が終わり堀に囲まれた村をアトイと共に歩みイリスが待っている家へと帰り路についていた。集会の結果、遅かれ早かれ似たような事が起きるのは明白であった為、亮自身の怪我が完治していないことと含めて暫らく様子を見ることで決着を見

た。

「のう…」
「なんだ？」

横を歩くアトイが唐突に語りかけた。

「オヌシが何処から来たのか、何をしておったのか敢ては訊かん、人には其々生きてきた路がありそれ故に背負う業も存在する。それは他人が容易に踏み込み覗き込んでよいものでは無い。」
「……」
アトイの言葉は、何かを背負った者の言葉であり不思議な質量を持っている。

「じゃがな、溜め込みすぎては何時しか己の想いに押しつぶされてしまうぞい。
――支えは誰しも必要なのじゃ、それが己の信念である者、己を取り巻く環境、己が得た地位、愛する者…それぞれじゃ、儂の場合はあの子の嫁入り姿をくたばる前に見る事じゃがな！」

そう言ってアトイは軽快に笑った。
その笑い声を何処か遠くに聞きながら亮は自分の支え、己という主観世界を動かす歯車は何かと思う。

俺の人生は邪神に奪われた。
復讐だけが俺という俺を動かす全てだった。
闇と狂気だけが世界を動かす歯車の総てだった。

しかし、復讐という目的は最早、達成不可能――
噛み合わなくなった歯車は空転し動力を伝達しない。

今は惰性で稼働しているが朧て何時か止まり、錆び付いて動かなくなり朽ち果てるだろう。

「――俺には分からない、俺には大切な人が居た…
彼女が傍に居るだけで満たされ。彼女が傍に居るだけで幸福だった
――でも彼女は【思い出に為ってしまった】――支えを失った者は如何すればいい？―支えを失った空白を抱えた人間は如何すればいい？」

自分は唯、自分を動かしていた発条（ゼンマイ）切れた反動で進んでいただけ
朧て止まるのは目に見えていた。
この虚ろを満たすには如何すればいい？

怒りは刹那的な力にしかならない。いわば巻いた発条の解放だ。
機械が動き続けるには発条を回さなければならない、それがアトイの言う支えだ。

「アトイ、お前の世界は何色だ？――俺の世界は白と黒（モノクロ）だ」
「ふん、何を言うかと思えば…白と黒だけならば色を付ければ良いだけじゃ。白黒ならば幾らでも色を付けれるだろうて、」

アトイの言葉に思わず目を張り、アトイに視線を向けた。

「オヌシの痛みは儂にはよう解る……、この歳になると時折ふっと思い出すのじゃ――色々とな…じゃがその白黒さえも儂という人生の絵画を構成する破片（ピース）じゃ」
「…強いのだな、――同じ強さをあの子にも感じた。なるほど…さすがはあの娘とお前は家族というわけか」

亮は敬を感じながら、目を覚ました時の事を思い出し頷きながらに言葉を口にした。
しかし、家族という言葉を聞いた途端、アトイの空気が変わる。

「確かに儂とあの子は家族じゃ、じゃが…儂とあの子に血の繋がりは無い」
「……なに？」

「昔の話じゃ……儂が遠出から帰って来る途中に息絶えた母親の躯の傍に立ち途方に暮れておった所を連れ帰ったのじゃ」
「――それでよく、あのように育ったものだ。」

「誠にのう…」

どこか遠くを見つめながらアトイはつぶやく。
おそらくはその日のことを思い出して居るのであろう。

「『残された人間は消えてしまった人の分まで幸福に成らなければならない』――」
「――――!?」

その言葉は不思議と自分の心に届く
何かの小説にでも出てきそうな有り触れた言葉――しかし、胸に穿たれた空虚に不思議とストンとやけにスムーズに落ちるそんな感じがした。

「あの子が言った言葉じゃ、儂を強いと言うのならそれはあの子がくれた強さじゃよ」

そう言って老婆は再び軽快に笑うのだった。
――焦る事はないか…もう少しゆっくり歩こう――
アトイの耳朶打つ笑い声を聞きながら亮はほんの…本当に少しだけ自分を許せそうな気がした――

魂のゼンマイ（後書き）

アンケート

次期主人公機にガオガイガーとデモンベインの二つが上がっているのですが散々悩んだ結果決めきれずに募集で決めたいと思います。

どちらを選ぶかでこの後のストーリーが変わりますのでご一票お願いします。（ＳＲＷかと思うじぶんが居るが…）

因みにデモンベインとガオガイガーは基本コンセプトが一緒なんです。

知？

魔導書＝ギャレオン搭載ＡＩ（原作ではＥＩ－０１戦で損傷）

威力
機体本体の為省略

意思
パイロットの事

これら三位一体で成り立っている上に鬼械神の全身をめぐる水銀を代用するＧリキッドなるモノがガオガイガーの機体内を循環していたり共通点が多い

また、クトゥルフにおいて獅子は魔を討ち払うモノという意味があ

ります。

これらをご理解の上でご投票をお願いします。

尚、締切は１９日００：００時とさせていただきます。

想愁（前書き）

たくさんの投票ありがとうございました！

次期主人公機はデモンベイン８票、ガオガイガー５票でデモンベインと為りました。

（俗にいう二号ロボなので登場はしばらく先ですが…）

想愁

夜も更けた矢先に引き戸を開くと家の中の灯りが飛び込み鼻孔を突く芳醇な香りが漂う。
そして家の中に入る亮とアトイをイリスの声が迎える。

「東雲さん！おばあちゃんお帰りなさい！」

「…ただいま」
「うむ、大事はなかったかえ？」

「はい！…お夕飯出来ているから一緒に食べましょう」

少々為れない言葉を口にし視線を彷徨わす亮をイリスが微笑みながら迎えた。
そして彼女は囲炉裏の中央に掛けられた鍋を焦げないように？きまわしており夕食を進める。

それに従い囲炉裏を囲むように座る。

「はい、どうぞ」
「ああ…」

四角い囲炉裏の右側に座った亮にイリスはよそった猪汁を差出し、其れを受け取る。
受け取った猪汁は白い湯気を上げ、芳醇な香りは食欲を刺激する。

一口、口に含む

口の中には山菜と猪の骨からとれた出汁がよく利いていた。
恐らく水も良いのだろう、素朴な素材で作られたそれは正しく家庭の味だ。
何より――暖かった。

「あの…どうですか？」

ふと掛けられた声に向き直る。
するとイリスが覗うような表情で己を見ていた。

「――暖かい飯だ……」
しみじみと心からの感想を口にする。
すると彼女は

「？汁モノが冷たかったら美味しくないじゃありませんか？」

「――――」

絶句、イリスの余りにも見当違いの回答に思わず口を開き忘我の域に到達する。
確かに猪汁が冷たかったら美味くは無いだろうが、己は温度の事を言っているのではない。

「な。なんですか！？東雲さん！私なにか可笑しなことを言いました！？」

流石に様子が可笑しいと気付いたのかあたふたと慌てて問い直す彼

女が少々可愛く見える。
己が言ったのは――人の温もりが感じられる料理、その温かさが心地よく。
とても美味いという事だ。

「おばあちゃん!?」

イリスは対面に座り汁を啜っている老婆に急いで問いかける。
それに対しアトイは目の前の少女の慌てようを関せず、ある程度、汁を啜り飲み込んだ所で漸く口を開く。

「イリスや…オヌシはもう少し情緒…というモノを学んだ方がよいのう……」
「そ…そんなぁ……」

呆れたアトイの物言いにイリスは項垂れた。

食事を終え、イリスに集会の顛末を語り特に俺が御咎めなしと知った時彼女は安堵の息を吐いた。自分の為に俺が如何にかされる事が無く安心したためだろう。

そして俺は少々、涼を取ると外に出て、コテージのような高床式の建築様式を取る高くなった床の上から壁にもたれ夜空を見上げている。
月、随分と細くなった三日月が夜空に浮かび神秘的な白さを放っている。

「世界のどこでも、どこの世界でも月は変わらないな……」

物鬱気に感想を口にする。

一通り夜空の星々を見てみるとどうやら地球と相違なく北半球の中間ほどの緯度に在る様だ。

つまり――此処はＩＦの地球、有り得たかもしれない可能性の地球

異次元空間でも何でもなく、本当に極めて近く限りなく遠い世界だ。

並行世界は鏡合わせのように無限に存在する。元の世界を探し出すのはその無限の中から砂の一粒を取り出すようなもの。

その規模は広大極まりない宇宙の内から砂の一粒を見つけ出すより何倍も難しい

己はもう帰る事は出来ない、己の手で仇を討つ事も叶わない。

――俺の復讐は終わった、終ってしまった。

この想いを塞き止めていたものが壊れ押さえられない思いが溢れだす――

会いたい、会いたい

今はまだ、覚えていられる

彼女の声を

彼女の姿を

彼女の何気ないしぐさを

それが思い出になってしまったけどまだ覚えていられる。

だけど思い出になってしまったことが悲しい。

自分の異能が魔を引き付けるのは分かっていた。なのに何故彼女に近づいた、何故、ぬるま湯に浸かり死の物狂いで力を磨かなかった――――

この胸を穿つ虚無――――それが、オレの罪

失った者、消えてしまった者は、二度と戻らない

今、己(オレ)を苦しめるこの気持ちが胸に有る虚無感が罰なのかは知らないし、分からないだけど、もう一度会いたい、お前に会いたい。

未練がましいとお前は言うかもしれないがもう一度、お前に会いたい

会いたいんだ……

ギリ…

木が軋む音と共に振り向く、其処にはイリスが手に何かを包み立っていた。

「あの東雲さん」

「どうした？」

「これ…洗濯していた東雲さんの御洋服から出てきたんですけど…

大切なものなんじゃ無いかなって」

恐る恐ると手に包んだ其れを差し出すイリス
その掌上にある鎖に繋がれた二つの指輪（リング）が月光に煌めき青白く光る。
それは、消えてしまった想い人に渡し、彼女も受け取ることで己の想いに応えてくれた物だった――しかし

「ああ、ありがとう…よければそれは君が持っていてはくれないか――」
「え！？できませんよ！！こんな高価なもの！！」

驚き、目を見開きながら慌てふためくイリスに亮はゆっくり首を左右に振る。

「それは…もうずっと…ずぅっと昔に意味を失ってしまった物で――だから俺には無用のモノなんだ。」

そう言って再び月を見上げる。
その時一陣の風が靡き夜風が頬を撫で、髪を揺した。

「売るのも良い、装飾として身に着けるも良い――俺の命を繋ぎ止めてくれた礼だ好きにしてくれ」

「――分かりました。では私が預かっておきますね。東雲さんがまた何時か必要とするその時まで」

一瞬、その言葉に思わず向き直り目を剥く、イリスを注視した後に彼女の変な生真面目さが可笑しくて微苦笑を漏らす。
口元を僅かに歪め、ポツリと零す。

「…律儀だな」
「はい！」
微笑み、元気よく答える彼女は眩しかった。

想愁（後書き）

後二話ぐらいしたら魔術戦&鬼械神戦に突入！

黒髪の少女

クタニド村から幾分か離れた場所に存在する街に設けられた教会、其処の祭壇の上に足を組み坐する流れるような黒髪を靡かせた少女は跪く男たち……クタニド村に押し掛けた僧兵と教主を見下ろしながら鐘の音のように澄んだ声色を聖堂に響かせながら問いかけた。

「……それで、あなた達はのこのこと尻尾を巻いて、逃げ帰ってきたというわけかな？」

「し…しかし！あの村は彼の忌まわしき神の力の残照が強く残っており、我等はその力を十全に発揮することは適いません、ならば万全を尽くしことに挑むべきと判断した故にです。」

膝を着き床を睨むしかない教主が唸るように答弁を紡ぐ。

頭(こうべ)をあげ、その少女を視界に入れることはその教主には出来はしない、なぜなら圧倒的な魔力がその少女から滲み出し、物理現象を起こしうるほどの圧倒的な圧力をもった少女は正しく超常の存在であり、僅かでも彼女の琴線に触れば自分は存在していないことを教主は理解していたからだ。

いま、その少女にとって自分は踏み潰すのも面倒な虫けらに等しいが故にその処分を免れていると言っても過言じゃあ無かった。

「――――まあいいわ、繋がりし者…ワイアードを見つけた、其れだけは認めてあげるわ。

あれは大事な彼の御方をお迎えするのに必要な器、あなた達の不用意な行動で失われてしまっては元も子もないわね。」

自分の答弁に対し少女が理解の色を見せたことで教主は密かに安ど

の息を着いた。

“ドサ…”

ふと、その時自分の目線の先に少女から皮袋が無造作に放り投げられ地に落ちた。

「これは……？」

その革袋を手に取り問い返す教主、感触から如何やら中身は粉末のようだ。

「白竜の牙……その粉末よ、知っての通りその牙はコルキスの魔術によって生み出されるゴーレム、竜牙兵の材料としても使われるものよ」

「……では、これを使って？」

「そうよ、あの神が私達を拒絶する因子を有して居るのならそこに住む者たちを触媒に使えばその守護概念を潜り抜けることが出来る筈よ、あとは村から離れればどうとでもなるでしょう？」

教主の問い返しに頷きながらに答えた少女に、教主は得心の頷きを以て返した。

しかし、そのすぐ後に気にかかることがあった。

「ですがあの男はいったい……魔力と呪詛の残り香を感じましたがあの村の守護概念に排除されないとは一体…」

教主の脳裏に昨日唐突に表れた亮の姿が浮かんだ。

彼の圧倒的な圧力、微かに滾る魔力の波動、そして濃厚な闇の気配

――彼の青年は目の前の少女と同じく現世の理から逸脱した存在だ。

そんな化け物を相手に出来はしない。

「確かに気にはなるはね…あの守護概念に排除されない魔導書は大体、三冊存在するわ。

一つは既知の通り、『セファー・ラジエール』もう一つが『セラエノ断章』……そして最後の一つが、」

少女の小鳥のように小さな口がはっきりとその名を告げた。

最強の魔導書、外道法典の名を――最も新しき旧き神の子たる書を

「死霊秘法（ネクロノミコン）――だとすれば絶対に必要となるわね、いいことネクロノミコンをその男が所持していた場合【あなた達の命と引き換え】にしてでも手に入れなさい」

――御意、バアッシュの御心の侭に――

少女の命令に対し教主を初めとした僧兵など教徒全員が口を揃えて復礼した。

それを少女は相も変わらず酷薄の微笑と共に見下ろしていた

懐かしい記憶、仄かに日本と同じ香を感じる。

この仄々とした穏やかさは嘗ての記憶を掘り起こす――――

『…ん～～～～？どうしたの、その子――――？』

『ああ……、その、なんだ……突然で済まないんだが』

武家屋敷の庭で打ち水を行っていた着物姿の女性

俺を拾った父となる人物は口どもりながら、頭をかきその女性に言った。

『この子…家の養子にしようと思う』

『…あ、そう――――じゃあ……朝餉の用意、一人増やさないといけないわね』

その女性は実にあっさりと受け入れた。

見ず知らずの汚らしい餓鬼を、振り向き笑顔を向けながら既に慈しむべきものとして認識している眼差しを注いだ。

その眼差しは暖かく、仄かに眩しかったのを俺は覚えている。

そしてその朝餉の席で出会った、流れるような黒髪を滴らせた、自分の最愛の女性であり姉となるその人に――――

『ととさま！お帰りなさいっ！！』

それは男の姿を認識すると同時に飛び出し俺を連れてきた男に飛びついた。

『ただいま、佐奈…いい子にしてたか？』

『うん！』

文字通り跳んできたその小さな体躯を受け止めると男は微笑み、脇のしたに両腕を通し持ち上げながら聞く、それは女の子だった。

女児もまた父の言葉に元気よく答える。

『そうか、じゃあ佐奈にとっておきの土産を上げようか』

『オミヤゲ？……なに！？』

俺は土産扱いかと、他にも言いようは幾らでもあるだろうと今では思う。

両の瞳を輝かせ問い返す女児を男は俺の真ん前へと運ぶ。

俺とその娘の視線が交差した。

互いに初見、沈黙と硬直が二人を支配していた。

『ほら、佐奈の姉弟になる子だよ。挨拶をしなさい』

『……あんた何歳？』

『……6歳』

父の言葉そっちのけで放った女児の問いに当時の俺は答えた。

そして俺の答えを聞いた女児は無い胸を張り言い張った。

『あたしは8歳！つまりアンタより二つも年上なの！！これから私のことはお姉さんと呼びなさい！！』

『…検討しておく』

『政治家答弁禁止！！』

視線を交え睨みと唸りを交わす二人

これが彼女との初めての会話だった――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2331w/

劉神　　（機神咆哮デモンベイン　リンク）

2011年12月28日23時51分発行